



風 狂

第 5 5 号

風 狂 の 会

風狂（第55号）目次

詩

海亀	出雲 筑三
具体と抽象の間で	高村 昌憲
生々流転	長尾 雅樹
「歩くことは生きること」	なべくら ますみ
カプリッチオ	富永 たか子
2月の空気	高 裕香
回帰	原 詩夏至

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（三十九）	三浦 逸雄
--------------	-------

エッセイ

老人の冷水（続き3）	北岡 善寿
お茶さしあげます	神宮 清志
チェルノブイリ そして福島（三）	高島 りみこ

翻訳

アラン『大戦の思い出』（二十一）	高村 昌憲 訳
------------------	---------

執筆者のプロフィール

アップルに行け
グーグルに行け
そして戻って来い

テスラにも行け
技能者軽視の日本へも行け
そして太って戻って来い

ハイテク覇権こそ
これからの新しき聖戦
見えない奴には見えない

若き海亀たちよ
金はいくらでも出す
故郷で思い切り暴れてくれ

能力ある人はさまざま
それを効率よく
利用するのが真の経営能力

貪欲さを持つて
十年後には世界一の強国を
きみたち海亀に懸けていく

やられた方はぶつぶつ言うだろう
凧とマージャンと国力は
結果が実って笑うのだ

私たちは現実の中で生活していても
人々の期待に応える様に督促される
日々の暮らしだけで充実していても
向上心とか進歩がないと軽蔑される

現実を生きることが蓄積を生むのに
抽象的な目的は直線の様に儂いのだ
直線とはこの世の何処にも無いのに
生活の指針の如く言われているのだ

実際の具体的な運動の日々の歩みは
アキレスが亀を追い抜く様なものだ
無いことだらけの抽象的な思考では
的に届かない矢で満足するばかりだ

直線を具体的に表す不可能を知って
具体と抽象の相違を明確に自覚せよ
不変であろうとする傲慢の心を捨て
具体の中から確かな目標を確立せよ

目標が出来たらつまらぬことは避け
我が儘な人間の話は聞かないことだ
出来ることから行う方法を身に付け
日々の営みから蓄積を覚えることだ

山川草木皆生命ありと
仙崖の夢告を朝夜に尋ね
流転滅滅の門流を
はるかな眼下に治めて
悠々自適の命運を神仙に潤す
遠大な眺望の天然自然から
桃源の裔が舟人に棹さし
漂泊の民人は人馬を引く
雲流れ霧迷う修羅人界から
山野の惰眠を破るものは誰か
清流集合して大河となる
満々として豊饒の輪廻を巡り
風雲の試練は俗界の塵埃を払う
威風堂々究極の救抜を求めて
天下る壮烈な生き残り作戦から
天上天下無明魔神の棲家となるか
はたまた法性真如の楽土となるかは知らず
唯に日々の安逸を祈り
とうとうと流れ下る人生流浪の旅を
溪谷の激流を転展して
峻烈の激甚を岩壁に刻む
人生の展望は茫洋として霞み
ゆるやかな水流に翻弄されながら
木の葉は沈み浮木は静かに漂よう
煩惱深き三悪未断の^{ともがら}輩たちよと
雷雲閃く修羅の闘浄現場から
生きるための闘いの映像空間が照写される
河口に辿り着いた一隻の小舟から
雄大な転生の秘話が語られる
水精の変身譚が天の怒りを鎮めるか
森羅万象生きとし生きるもの
生命ありと夢に諭されて
仙界の見聞を糺して人情の襞を覗く
無限に円環する大河の流転を垣間見る

こういう呼びかけで集まった人たち
市民会館の募集チラシを見て
まだ友だちとは言えない仲
自己紹介はし合ったけど名前なんか覚えていない
ここは競い合う必要のないところ
歩くことを愉しむ年配者たち

背筋 手足を伸ばした準備体操の後 歩き出す
歩く 歩く 大した景色でもない所を
物足りないなどと言っはいけない
歩くのだ もっとの弱者の歩行に合わせて
今日のコースに登りはない
干からびた空っぽの畑 隣りは茶色に枯れた葱の畝

高校の前を通った時 生徒たちが
「今日は！」と挨拶してくれた
殆どの人の子孫世代 みんな笑いながら手を振って応えた
途中数人が横道に逸れ 帰りの駅へと向かった
落伍者だ などと言った人はいない

4時間 14km 2万4千歩 今日の成果
まだ大丈夫 来月も歩ける
きっと皆もそう思っている だろう

久々にピアノを弾く
心なしか黒ずみ
黄ばんだ鍵盤

君も年をとったね

子守り歌は
微睡む夢を醒ます
右手の暴れ
山男の歌は
喧騒を逃がれ
星を間近に孤独に慣れた男を
山の天辺に置き去りにした
左手の馳走

若い日の
こざかしい技巧が懐しい

鎌倉の歌は
いきなり開け
行く手 行く手に桜が見え
江の電は
あの辺りで傾いで走る
七里ヶ浜の清漣に
君は雀躍したね

行き暮れた部屋
季節のはじまりを
狂想曲にのせ

曇りのち雨

東京の空気は甘い！
そう言い放したのは
韓国から日本にもどった友人

東京の冬の空気が甘い？
甘い香りの花が咲いているわけでもなく
潮気がない！ ということなのだろうか？

甘い空気を感じることができる？
鎌倉の山へ 海へ
足をせっせと運ばせた

冬の晴天は真っ青だ
光まで青に染め
透き通り 雲一つもない

青に染められた空気は
ピンと糸が張り詰められたように
寒さだけ静かにを伝える

山を愛する者、海を愛する者が
行きかう人に挨拶を交わす。
「こんにちは！」から甘い空気を感じた

一方通行の裏路地の真ん中で
轢死した鳩を遠目に目撃して
きみは家路を大きく迂回した
あたかも帰宅自体を断念して
行先のない旅に出てしまったと
心得顔の誰彼が今なお
人々に語り伝えているように

だがきみはまだ帰還の途上なのだ
智謀の遭難者の瞳は依然として
彼だけのイタカの城館に向けられ
あんなにも行路死ゆきだおれを待たれた
その四肢五体は波濤と陽の光と
嵐と仮借ないの飢渴のため日に日に
寡黙に壮健に引き締められてゆく

実際彼らはどうする気なのだろう
ある朝きみが静かに門辺に立ち
復活した白い翼の鳩と連れだって
「ただいま」と旅路の終わりを告げたなら？

注意したまえ
かの賢者も言うごとく
回帰するのだ
〈抑圧されたもの〉は
いつの日か必ず
声もなく――あたかも
〈主の日〉が盗人の如く来るように



三浦逸雄「幻視」8号（紙・アクリル）

天皇の重臣は政治を動かす要人でもあるのだが、宮内庁長官の田島道治も、「天皇の道義的責任を明らかにする声明を公表しようと模索した。しかし、首相吉田茂らに抑えられた」（加藤恭子『昭和天皇と田島道治と吉田茂』）。

こうして見ると、吉田茂という政治家の存在は戦後の日本の国の形を今日我々が目にする明治からの体制に定着させた張本人ということになる。勿論吉田一人で出来ることではなかった。マッカーサーの統治政策に天皇制護持を託したのである。吉田は大磯に住んで白足袋を履き、葉巻煙草を燻らしている政治家であった。この政治家に刃向かって屈服させた者は誰もいなかった。後年、保守党には五つの派閥が出来た。三、角、大、福、中と言われた。三木武夫、田中角栄、大平正芳、福田赳夫、中曽根康弘である。このうち中曽根康弘は五十二年一月三十一日、衆院予算委員会で「（退位の）最後の機会として、平和条約発効の日が最も適当」と発言し、吉田茂に「「非国民」と退けられた」とある。中曽根三十三歳の時であった。中曽根は当時の政治家として唯一現存するが、ある時期、この五派閥の長の中で最も悪質なものは中曽根であると言う者があった。勿論私の記憶なのだが、文芸雑誌に「群像」や「新潮」があつて、そのどちらかに石川達三が日記を載せる企画があつた。石川は左翼といってよい作家だから右翼的に見える中曽根は悪質に見えたのかもしれないが、それは天皇論から来ている攻撃ではなかったように思う。それより同じ新聞の同じ七月十三日に出ている中曽根氏のインタビューは、衆院予算委員会の模様をかなり詳しく述べているのである。

「いよいよ日本が占領体制から脱却し、独立国家としての基本体制をつくって行く大事な時期だという自覚のもとに、ときの吉田茂首相に質問するという形で取り上げたのです。

天皇の側近だった木戸幸一さんや、東大総長だった南原繁さんが、天皇退位論を唱えていた。この問題について、国民はどう判断してよいのか迷っていたし、答えを求めていた時代でもあった。

保守政治家がそういう質問をするのは勇気のいることだったが、国民がもやもやしている問題には結末をつけておく必要があると考えた。

質問の真意は次のようなものだった。

人間天皇となられた天皇は過去の戦争について非常に苦悩されておられるのではないか。もし天皇に退位したいというお気持ちが万一あるような場合には、吉田首相はそれを抑えてはならない。もとよりこれは天皇ご自身が決められることで、外からとやかく言うべきことではない。

—中略—

吉田さんは私の質問の意味を曲解して、「天皇退位を希望するがごとき者は非国民」と、珍しく強い口調で答弁した」

中曽根は「もし天皇に退位したいというお気持ちが万一あるような場合」となるべく相手を刺激しないように質問しているが、天皇自身に退位の希望があるのにそれを抑えたのは敗戦国日本の統治を優先して天皇の存在を利用したマッカーサーと当時の政府を掌握していた吉田茂たちで

、これが今日の保守本流の源泉であると言ってよい。中曽根は「もし天皇に退位したいというお気持ちが万一あるような場合」などと言っているが、天皇は退位したい希望の方が強かったのであって、それはやはり戦争責任に由来するのである。政治家ではないが、天皇の近くにいた白樺派の作家長与善郎に、昭和二十七年三月に書かれた「天皇論」がある。私はこの論考のことを同人誌に書いたことがあるが、改めてここに出すつもりはない。出すとすれば、「自分は今でも必ずしも天皇制そのものの絶対支持者ではない」という一行である。

戦勝国司令マッカーサー元帥は敗北した国家の施政官であって、日本の統治のためには、敗戦まで日本の元首であった天皇の存在を利用し自国の利益を図ることであった。そのために天皇制を温存し、象徴として天皇を国民の上に君臨させたのである。この構図は日本の右翼の側に影響力を持つ人達をも刺激した。そのことが矢張り同じ七月の十二日の「戦争責任」というテーマで、児玉誉士夫と石原慎太郎を登場させるのである。が、その前に新聞は、宮中で天皇に仕えた人物に発言させるのである。

「真におそれ多いことではありますが、道義的には責任はあるでしょう。終戦時の御前会議に天皇様に御裁可を仰いでいるのですから……。 (略) 天皇様はまことに平和を愛されているお方でした」

戦前から戦後にかけて宮中で昭和天皇に仕えた甘露寺受長は、天皇の戦争責任について、こう語った (エール出版社編『我々にとって天皇とは何か』)。

明治神宮の宮司も務めた甘露寺は、天皇を深く敬愛していた。しかし、そのことと戦争責任は別の問題と受けとめていた。

保守のなかで天皇の戦争責任や退位に言及したのは、甘露寺だけではない。

戦前からの右翼活動家で保守政界の黒幕だった児玉誉士夫は、雑誌「正論」七十五年八月号 (産経新聞出版局) に「わたくしの内なる天皇」と題するエッセイを寄稿し、こう主張した。

「私は法的な開戦の責任所在などどうでもよいと思っている。(略) 陛下に戦争の責任をとっていただきたいなどと言うつもりはない。ただ、陛下に天皇としての責任を明らかにしていただきたいかったのである。具体的に言うならば、天皇の御退位を願いたかったと言うことだ」

この次に紙上に姿を現すのは、戦時中に左翼から右に転向した作家の一人で、戦争中二日間に渡ってひらかれた呪われた座談会という悪評のあった有名な「近代の超克」座談会に参加した林房雄である。

「作家林房雄は『大東亜戦争肯定論』の中で、『戦争責任』は天皇にも皇室にもある。これは弁護の必要もない事実だ」 (傍点原文) と書いた。

続いて小説「太陽の季節」で名を挙げた石原慎太郎の発言が取り上げられる。石原は「日本の道義」で、現代日本の「道義の退廃」を嘆きながら、「天皇の戦争責任が退位という形で示されなかったことは、天皇制にとっても、不幸であった」 (「自由」七十四年四月号) と論じたことがある。

この後、新聞は明治憲法について簡単に触れる。私でも覚えているのは、「天皇は神聖にして侵すべからず」である。この憲法第三条は、一般に、天皇の無答責 (法的な責任を負わないこと) を規定するとされる。統治の全責任は、補弼する内閣が負う! —「昭和天皇に戦争責任はない」とする論者は、内閣法制局を含め、ほとんどがそう主張する。

これに対し、「責任あり」とする論者からは「国内法である明治憲法の規定をたてに、対外的な責任まで免れることはできない」「法的にはともかく、道義的責任がある」「軍の最高指揮権 (統帥権) は補弼を介さず天皇に直属していた」「現実には天皇は主体的に戦争指導にあたった」という反論が出されてきた。(続く)

京都の東山の一角にある南禅寺、ここは観光客でいつも大繁盛だ。近頃では外国人が大勢押しかけ、八割は外国人である。彼らは揃って建物の中に入って広い廊下を歩いて行く。やがて明るく開けたところに出て、大きな庭を鑑賞する。このとき皆の後を着いて行かずに、玄関を上がってすぐ右にある、お茶の接待のところに行ってみるのも一興である。小さな机の前に坊さんが座っていて、そこでお茶を戴きたい旨申し入ると「お茶をいっぶくう」と奥のほうに向かって声をかける。これが独特の抑揚をもって、坊さんらしい響きのいい声で呼びかける。するとまだ少年の域を出ていないような、頭を青々と剃り上げた坊さんが出てきて案内してくれる。

大勢の観光客と別れて、誰も行かない北側の狭く薄暗い廊下を案内されて行くと、緋毛氈を敷いた八畳くらいの部屋に着く。襖には狩野派の名画と思しき絵がふんだんに見られる。前面には小さな庭が繊細かつ厳しく造られている。東山に面しているので急な山肌が迫り全体に暗い。小さな滝が落ちているのが素晴らしい。ここで和菓子を摘まみ、お茶を戴いていると、ほんとうに静かな心境になってゆくのを意識する。禅の心などもとより理解の外にあるけれど、そんな雰囲気には十分没することが出来る。あたかも時間が停止したようなひとときが過ぎてゆく。いい経験が出来たと満足して、やがて皆の行く表側の廊下を進んで広い庭を鑑賞する。

わたしはお茶の心得はまったくない。お茶の稽古に行ったこともないし、その作法を知らない。それでもかまわない。度胸を据えて出てきたお茶を喫するだけである。それがほんとうにいい気分にしてくれるのだから有り難い。ということでお茶を出してくれるところに行き合うと、何はともあれ上がり込んで戴くことにしている。

この志向をもつに至ったのは二九歳のときだ。松江を訪れたとき、茶室で有名な「菅田庵」をぜひ観たいと思った。そこは松江藩主・松平不昧公の設計によって建てられた茶室で、国の史跡及び名勝とされ、一部は重要文化財に指定されている。「菅田庵」は松江郊外にあり、タクシーでなければ行けない。広い雑木林に着くとそこから先は歩いて進む。深閑とした林の中をしばらく進むと、素朴な木戸が行く手を塞いでいて木戸はしっかり閉められている。木戸の上方に小さな紙が貼ってあって「お茶さしあげます」と書いてある。この有名茶室が一般公開されているということは、これで嘘ではないことになる。しかしこの小さな紙片に気付かなければ立ち去るほかないだろう。たとえ気付いても、木戸を開けて中に進むには多少の勇気が必要である。どうやってお茶を飲んだらいいか分からないという一般客なら、だいたいここで退散ということになるのではないだろうか。しかしここまで来たんだから「エエイどうにでもなれ！」と、自棄に近い蛮勇を奮って木戸を開けて入った。

玄関に入ると、現れ出でた中年女性の案内で広い部屋に通された。古書画に飾られた奥ゆかしい部屋はかなり広く、前に広がる庭が素晴らしかった。池を配しその向こうに築山を築き、遠い山々が借景となっていた。赤松が山頂に並んだ山の連なりは、まさにこの庭にうってつけの景色になっていた。女性の説明は過不足なく、上品な言葉遣いが好もしかった。庭に降りて池の周りを一巡し、菅田庵をゆっくり鑑賞しえたことに満足できた。帰り際に「いくらお支払いしたら

いいか」を尋ねると、その答えがまた珍無類だった。

傍らの古風な木の台を指さしながら「お池の鯉のお麩代を置いてください」と言った。なんとも浮世離れしたやりとりではないか。お茶を戴くという非日常的な遊びにしか出てこない言葉だろう。この経験がその後の、お茶を積極的に戴こうという原点になった。

琵琶湖の周辺を旅したときは、いいお茶を喫したという点で忘れがたい。長浜の町は歴史情緒のあふれた町である。こじんまりとしているけれど、黒壁が並ぶ町並みに風情がある。近くに姉川古戦場、北には賤ヶ岳古戦場がある。秀吉が長浜城を築いて出世の本拠地となったところだ。長浜城は琵琶湖のほとりに建てられたもので丘に登ることはない。普通の城砦は高いところに築くものだけれど、登城は楽だっただろう。その三階でお茶を戴いた。こういうところで飲む茶の湯は格別のものがある。訊いてみたら「遠州流」だそうだ。小堀遠州はこの地の人で、造庭家であるばかりか茶の宗匠でもあったようだ。悠久ともいふべき会話がよどみなく、また軽やかに続いて、その雰囲気の良いさに酔うことが出来た。

その隣町の彦根城には何度か来たことがある。その目的は博物館の能面である。井伊家伝来の能面を多数常設展示していることで、われわれ能面師には有難いところなのだ。本丸から降りたところに「楽々園」と「玄宮園」という庭園がある。井伊直弼の大名の居所、それが横浜の三溪園とよく似ている。ここでもお茶を戴くことが出来る。座敷に通されて大名の気分と得意になったりするの、贅沢にして結構なことではないか。

お茶を戴いて出てきたとき、たまたまこの園内に来ていた五〇歳前後と思しき二人連れを見かけた。この二人は夫婦ではないことは一目で分かる。ともに第一装のお洒落を決め込んで、写真など撮ったりしていた。写真を撮るとき女のポーズのとり方が、いかにもそれらしく見えて素晴らしい見応えだった。ほとんど人気のない庭園の中で、なんとなく人目を避けた素早い行動である。不倫という妖花を咲かせつつ、燃え上がる男女の心が嫌でも伝わってきた。これほどに張り詰めた充実の極地ともいふべきひとときをもっている者が居る。それにひきかえ、茶の湯を楽しんでいるとは少し暢気すぎやしないか、そんなことをしている場合かよ、という反省を強いてくる。おかげでいい景色を拝見できたことを嬉しく思った。

茶の湯という伝統芸はあまり身近なものではない。ほとんどの人にとって、無関係で生涯を過ごすのではないだろうか。しかしその気になれば、この世界を多少無責任に、またごく気楽に愉しむことが出来るというのは有難いことだと思う。一つ残念に思うのは、こうした愉しみに出会うのは関西地区に限るということだ。関東地方でふらりと茶室に入って茶を楽しんだという経験がない。まったく今までのところ見掛けていないからだ。伝統文化においては「西高東低」といわれる。能面作りをしていてもそのことはしばしば痛感してきた。茶の湯でも日常のものになっているのは関西地方であることを認めざるを得ない。（了）

2011年3月11日14時46分、東日本大震災が発生。私は当時、東京の自宅でうららかな春の陽差しを受けながら、パソコンに向かい仕事をしていました。仕事机が崩壊しそうなくらいの突然の大きな揺れに、何が起きたのか理解するまでにしばらくの時間が必要だった。テレビは随分以前に廃棄してしまっていたので、ラジオから流れてくる地震速報と、スマートフォンのSNSで刻々と表示される東北の海岸線で車や家々が津波に攫われていく映像を観て、たいへんなことが起きたことを知った。首都圏では終日電車が止まり、その日のうちに帰宅できない人びとが続出し大混乱となった。だが、そのときはまだ福島第一原子力発電所、通称「フクイチ」がどのような状況に陥っていたのか、私たちは知るよしもなかった。

翌日の12日夕方、1号炉が水素爆発した映像がテレビで流され、その後3号機、4号機も水素爆発、フクイチが壊滅的状況になっていることが分かったのだ。原子炉の圧力破壊を免れ、東日本全体が壊滅せずに済んだのは運がよかったともいわれている。しかし事故から8年目となる2019年の現在でも、メルトダウンした核燃料がどうなっているのかも分からず、収束のめどは立っていない。汚染水は貯まる一方で、基準値を大幅に上回る放射性物質を含むこの汚染水を海洋投棄する案が浮上、積みあげられた除染土は全国の公共事業や農地造成で再利用できるようにするという信じられないような政策が進められている。

また原発事故前には年間被曝量限度が1mSv（ミリシーベルト）であったのに、事故後は20倍の20mSvに引き上げられ、現在でもその値のままだ。日本政府のこの政策に対し国連人権委員会は「日本政府には、子供らの被曝を可能な限り避け、最小限に抑える義務がある。子供や出産年齢の女性に対しては、避難解除の基準をこれまでの「年間20mSv」以下から「年間1mSv」以下にまで下げる。無償住宅供与などの公的支援の打ち切りが、自主避難者らにとって帰還を強いる圧力となっている」と勧告しているが、日本政府は無視し続けている。合計被曝量が癌のリスクを決定するため、汚染された地域に長期間暮らすことは癌になるリスクを高めることになるのだ。それにもかかわらず、2017年3月末に国と福島県が自主避難者の住宅無償提供を打ち切りにしたのを皮切りに、今年3月末にはすべての都道府県で住宅無償提供が打ち切られる。

一方、チェルノブイリ原発事故で汚染されたウクライナとベラルーシでは、事故から5年後の1991年に「チェルノブイリ法」を制定、その後ロシアにおいても制定されている。「チェルノブイリ法」とは年間被曝量が5 mSv以上の地域は「強制移住区域」、1～5 mSvの地域では住民に移住の権利が与えられる。1～5 mSvの地域から移住しなかった住民にも公共料金や家賃の割引、無料の検診や給食の無料化など、様々な補償を定めている。しかし日本においては「チェルノブイリ法」では強制移住区域となる5 mSv以上の地域に帰還、居住することを即しているのだ。「チェルノブイリ法日本版」を作る動きもあったが、被害を過小評価したうえ、不都合な分析データを認めたくない国側からの様々な抵抗に遭い、頓挫してしまっただけだ。

政府が無策を続けている間に、福島県内の小児甲状腺癌及びその疑いのある子供の数は、2018年9月時点で202人に上っている。当初は福島県全員の子供を検査したために、潜在的な甲状腺癌

が見つかったただけだとするスクリーニング効果だとしていたが、最近はその声も聞かれなくなった。もはやスクリーニング効果とすることはできず、それだけ事態は深刻だということだろう。

2015年、『チェルノブイリの祈り 未来の物語』の著者スヴェトラナ・アルクシエーヴィチは東京外語大学から名誉博士号を授与されたのを受けて来日、福島県原発被災地を訪れ、被災者たちの声を聴いている。同大学で講演を行ったアルクシエーヴィッチは、次のように語っている。

「福島で目にしたのは、日本社会に人々が団結する形での『抵抗』という文化がないことです。祖母を亡くし、国を提訴した女性はその例外です。同じ訴えが何千件もあれば、人々に対する国の態度も変わったかもしれません。全体主義の長い文化があったわが国（旧ソ連）でも、人々が社会に対する抵抗の文化を持っていません。日本ではなぜなのでしょうか」

私たちはアルクシエーヴィッチに対し、どのようなことばを返すことができるだろうか？

また、ベラルーシ科学アカデミーのミハイル・マリコ博士は言う。

「チェルノブイリの防護基準、年間1 mSvは市民の声で実現されました。核事故の歴史は関係者が事故を小さく見せようと放射線防護を軽視し、悲劇が繰り返された歴史です。チェルノブイリではソ連政府（現ロシア）が決め、IAEAとWHOも賛同した緩い防護基準を市民が結束して事故5年後に、平常時の防護基準、年間1 mSvに見直させました。それでも遅れた分だけ悲劇が深刻になりました。福島でも、早急な防護基準の見直しが必要です」

私たちは子供たちに、未来の人びとに一体何を残そうとしているのだろうか？ 私たちは常に問い続け、必要ならばすぐにでも行動に移さなければならない。悲劇を繰り返さないために。

（了）

参考文献

- <https://toyokeizai.net/articles/-/151985> 〈「自主避難」3.2万人、住宅支援打ち切りに悲鳴〉岡田 広行（東洋経済）
- https://www.huffingtonpost.jp/2016/11/29/svetlana-alexievich-_n_13295940.html 〈「日本には抵抗の文化がない」福島訪問したノーベル賞作家が指摘〉安藤健二（ハフポスト）
- <http://hokinet.jp/30.html> 〈原発事故 国家はどう補償したのか ウクライナの補償〉放射能から子どもを守る企業と市民のネットワーク
- <https://www.sting-wl.com/category/福島原発事故と小児甲状腺がん> 〈子供の甲状腺がん〉福島原発事故の真実と放射能健康被害
- 『フクシマ6年後 消されゆく被害 ——歪められたチェルノブイリ・データ』日野行彦・尾松亮（人文書院）

第十七章

私は無線技師だったCを少しだけ見ました。彼も恐るべき穴から少し離れていましたが、反対側の穴でした。彼も又、食事の時間に一度ならず生命を危険に晒しました。敵の砲弾には、今では衝撃に大変敏感な照明弾も備えられていました。穴はまさに少しも深くありませんでしたし、破片は殆ど地面すれすれに爆発しました。シャンパーニュ地方での破片は最早垂直に噴出しませんでした。それまでは見物人でいられる距離でしたが、今では接近する程の距離になりました。でも、ジャンナンはそれらのことには少しも心配しませんでした。彼が自由に行動を定めていたのは本当で、私が彼以上にもっと細かい音を聞く耳で知ることが無かったのも本当です。クレール＝シューヌ野営地の曹長との沢山の口論の後で、その歩兵隊で過ごすのを一度ならず要求した後で思い出すのは、ジャンナンの無視するやり方でした。彼はこの危険な地方で誇りを回復したのであり、飛行機を見分けたり合図したりする役目を与えられていて、肩からは斜めに喇叭を掛けていました。私がモールス信号を笛で彼に教えたのはこの頃です。二回の講義で計三時間足らずでした。それに反して新聞を読むことは少しも進歩しませんでした。彼は音で文字を解釈する術を覚えましたが、彼の注意力は全てがそこに使われました。決して意味に関わるものではありませんでした。抽象的観念は彼にとって何ものでもなかったのです。モールス信号は、私たちの授業において単純で、日常用いる伝言以外には少しも表しませんでした。従って、たどたどしく読む代わりに、ここで彼は非常に早く見抜くことを学びました。たどたどしく読むことは一つの合理的な方法ですが、恐らくそこから抜け出すことは出来ません。技術的知識を伝えることは、あるいはこう言っても良いのですが修辞学の知識を正確に認識することは困難であり、恐らく不可能です。それは地位があってそれらに専念する人々には不安です。

私たちの班は、より一層若い新兵たちが少しずつ来て一新されました。新兵たちの中には吃りが一人いましたが、健康で勇敢な兵士でした。彼は大変上手に歌いました。歌っている時には吃ることはありませんが、吃りであることは容易に分かりました。彼が自分の意見を押し進めて主張しなければならなかった時の苦労は、それらの意見を変えることを思い止まらせました。私はその時、雄弁家としての何かを理解しました。私はジョレス(1)においてさえも、山の如く文章をかき立てる優れた吃りの何らかの動きにびっくりしたことを思い出します。その爆発は確信を生みます。私はそれを私の吃りの裡にも大変良く観察しましたが、吃りも砲弾の中ではありきたりのものに変えて仕舞いました。その様にして、私たちの大変に自由奔放な会談において彼は、極端な臆病による余儀ないアクセントによって、どんな独断論にも連れ戻しました。例えば彼は全てが戦争であり、給料のための戦いも戦争であり、どんな競争も戦争です。従って戦争は何時もあるだろうと主張しましたし、何時も怒りっぽくなっていました。私は、戦争への気力が名誉以上に多くの関心が無かったことを指摘しながら、この屁理屈を何回も解きました。勝つための、そして少しも強くなくても勝つための僅かな機会と共に現在では全てに危険を負っていた人々にとって、それは大変容易に理解することです。しかし、私はこの吃りの人を一度も困らせることが

出来ませんでした。彼は確かに話をする器官に対して多くの困難を持っていました。そして更に彼は、同じことを激しく繰返し言っていた様に、ハンマーで打つが如くに相手の人々を説得しました。彼はそれ故に思想を支配しているのかも知れません。耳が聞こえない人も同じ種類の力を持っています。吃りや耳が聞こえない人々によって管理された国民を考えるのは私の気に入りましたし、逆説的なもう一つの喜びを齎します。私は諷刺的なこの動きに従って『壺王』という表題の作品を書きましたが、未完成の儘です。私は当時そこに幾つかの章をつけ加えました。私には正確な観念に基づいた根拠があって、莫大なこの種の冗談に驚くべき才能があります。不幸なことに文学者の特性の中で私に欠けるものが一つありますが、それは野心です。私は容易に満足して私の仕事を行いますし、仕事で熟考した数々のことを書きます。私の最高の独創性がそれらを助けます。そして私は、野心を望まなかった文学者であると自ら思っています。（完）

（1）ジョレス（一八五九～一九一四）は、政治家・社会主義者で統一社会党の指導者として反戦平和主義を説き、狂信者に暗殺された。「ユマニテ」紙の創刊者でもあった。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲筑三（いずもつくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

北岡善寿（きたおかぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットタントにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こうゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

神宮清志（じんぐうきよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとポールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「路」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんで来て、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高島りみこ（たかしまりみこ）

一九六〇年高知県生まれ、東京都在住。

日本詩人クラブ会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』（二〇一八年）

高村昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤忠詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年からパプーの電子書籍に、随想集『アランと共に』（全3巻）及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』（全5巻）『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録中。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

富永たか子（とみながたかこ）

一九三四年 福岡県柳川市生

日本ペンクラブ・日本現代詩人会・横浜詩人会各会員

「回遊」「めびうすの輪」「相模原詩人クラブ」に所属

既刊詩集①『シルクハットをかぶった河童』（第二回横浜詩人会賞受賞）

② 『月が歩く』

詩人北原白秋と同郷。幼児教育に携わり、詩に親しんできた。相模原詩人クラブ主宰。三十五年間詩誌「ひばり野」を年一回発刊し現在に到る。「風狂の会」にて多くを学び席をおく。

長尾雅樹（ながおまさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくらすみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらすみ詩集』『大きなつぐら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。
日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦逸雄（みうらいつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう) 第55号

2019年2月21日 登録

<http://p.booklog.jp/book/125484>

編集：風狂の会 (担当：高村 昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/125484>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト